

# *Le Petit Prince*の日本語訳と韓国語訳を めぐって

—内藤濯訳と安應烈訳を中心に—

田川光照\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 韓国における *Le Petit Prince* の翻訳状況
  3. 韓国ではなぜ「異常なまでに」読まれているのか
  4. 日・韓における *Le Petit Prince* 翻訳の歴史的流れ
  5. 内藤濯訳と安應烈訳が示唆すること
  6. おわりに
- 

## 1. はじめに

サン＝テグジュペリ Saint-Exupéry の *Le Petit Prince* は、著者がアメリカに亡命中であった1943年4月に、ニューヨークのレナル・アンド・ヒチコック Reynal & Hitchcock 社からキャサリン・ウッズ Katherine Woods 訳の英訳版 (*The Little Prince*) がまず出され、ついで仏語版が出版された。本国フランスでガリマール Gallimard 社から最初に出版されたのは、サン＝テグジュペリがフランスに戻り、戦線に復帰して1944年偵察飛行中に行方を絶ってから1年あまり後の1945年11月30日であった<sup>1)</sup>。それ以後、著作権を獲得したガリマール社版を底本にして世界中で訳書が出

---

\* 愛知大学 経営学部 教授 フランス文学

1) 1945年11月30日という日付は、1999年にガリマール社がレナル・アンド・ヒチコック社版を定本にした際に、サン＝テグジュペリの著作権継承者フレデリック・ダゲールが同社のフォリオ Folio 版に付けた序文による。ガリマール社

されるようになり、ガリマール社のWebサイトによれば、現在、約160カ国語に翻訳されているという。

この名作童話が初めて日本語に翻訳されたのは1953年のことであった。訳者は内藤濯で、岩波書店から「岩波少年文庫」の1冊として刊行された。以来、『星の王子さま』という独創的なタイトルを付したこの翻訳は、2005年まで唯一の日本語訳として親しまれてきた。しかし、2005年1月22日に*Le Petit Prince*の日本における著作権保護期間が終了したことにともない、岩波書店がもっていた翻訳独占権も失効したため、続々と新訳本が出されるようになった。2006年7月中旬の時点で、内藤濯訳を含めて14種類の日本語訳を読者は手にすることができる<sup>2)</sup>。なお、新訳本の中には『星の王子さま』以外のタイトル名を採用しているものもあるが、小論では日本語訳については『星の王子さま』で統一する。

ところで、韓国においては、1958年に東亜出版社から出された『世界文学全集』第13巻に、サン＝テグジュペリの他の作品とともに安應烈訳が収録されて以来<sup>3)</sup>、『어린 왕자』のタイトル名で親しまれ、多種多様な訳本が出されている。

以下、まず韓国での『어린 왕자』の出版状況を概観してから、日・韓それぞれの最初の翻訳、つまり1953年の内藤濯訳<sup>4)</sup>と1958年の安應烈訳<sup>5)</sup>に立ち戻って両国

は公式には1946年を出版年としている。なお、ガリマール社がレナル・アンド・ヒチコック社版を定本にしたのには、レナル・アンド・ヒチコック社版とガリマール社版に次のような相違があったという背景がある。すなわち、(1)挿し絵が、前者のものに比べて後者のものはずさんであったこと、(2)第2章で出てくる小惑星の番号が前者の「325」に対して後者では「3251」になっていたこと、(3)第6章で王子が夕陽を眺める回数が前者では「44」回、後者では「43」回になっていたことである。ガリマール社は1999年になって、サン＝テグジュペリ自身が校正したレナル・アンド・ヒチコック社版を定本とした。

2) 2005年から出された新訳本は次のとおりである。

三野博司訳『星の王子さま』論創社、2005年6月

小島俊明訳『星の王子さま』中央公論新社、2005年6月(2006年3月に文庫本)

倉橋由美子訳『新訳 星の王子さま』宝島社、2005年7月

山崎庸一郎訳『小さな王子さま』みすず書房、2005年8月

池沢夏樹訳『星の王子さま』集英社、2005年8月(単行本・文庫本)

藤田尊潮訳『小さな王子 新訳「星の王子さま」』八坂書房、2005年10月

川上勉・甘楽美登利訳『プチ・フランス』グラフ社、2005年10月

辛酸なめ子訳『「新」訳 星の王子さま』コアマガジン、2005年12月

石井洋二郎訳『星の王子さま』ちくま文庫、2005年12月

稲垣直樹訳『星の王子さま』平凡社、2006年1月

河野万里子訳『星の王子さま』新潮文庫、2006年4月

河原泰則訳『小さな星の王子さま』春秋社、2006年5月

谷川かおる訳『星の王子さま』ポプラポケット文庫、2006年7月

なお、このほかに小島俊明訳を用いた仏和対訳本が2006年6月に第三書房から出版された。

3) 『어린 왕자』以外に収録されている作品は次のとおりである：『南方郵便機』『夜間飛行』『人間』大地、『戦時操縦士』『어떤 불모에게 부치는 글』

における *Le Petit Prince* 翻訳の歴史的流れを整理するとともに、その二つの翻訳が提起している問題について若干の考察を加えたいと思う。

## 2. 韓国における *Le Petit Prince* の翻訳状況

上述のように、*Le Petit Prince* の日本語訳は2005年まで内藤濯訳の一種類しか存在しなかった。それに対して、韓国では1958年以来、実に多様な訳書が出されており、2006年3月末の時点でインターネット教保文庫での検索の結果、約160点もの『어린 왕자』が出されている（うち約50%が子供用）。その形態も、幼児・児童用のものを含め『어린 왕자』単独のもの、『야간 비행』などサン＝テグジュペリの他の作品と組み合わせたもの、原文（ほとんどは英語版）を付録につけたもの、対訳本（ほとんどは英韓あるいは韓英対訳本）、「論述準備토술 대비」と銘打ったもの、漢字学習用に漢字語を漢字表記したもの、絵本、漫画本など、実にさまざまである。日本でも、2005年以前から、注釈本や、ガリマール社が *Le Petit Prince* を幼児用に絵本化したものの日本語版があるにはあったが、その種類はごく限られていた。対訳本でさえ2006年になるまで存在しなかったのである<sup>6)</sup>。

では、1958年以来出された『어린 왕자』の出版点数はどれくらいになるのだろうか。2006年3月末に、上述のインターネット教保文庫のほか、韓国国立中央図書館、韓国教育學術情報院の韓国研究情報サービス（全国大学所蔵資料検索サービス）の各Webサイトでの検索結果を基礎にし、さらに地方の公立図書館のWebサイトでの検索結果をも参照して、翻訳者の実数を数えてみた。出版点数ではなく、翻訳

4) 内藤濯訳のテキストとしては、筆者の手元にある1964年発行の岩波少年文庫版『星の王子さま』初版第6刷を用いる。1953年の初版第1刷との違いは、訳者の「あとがき」に1961年に書かれた文章が付け加わっていることだけである。

5) 安應烈訳のテキストとしては、筆者の手元にある、1960年に再刊された東亜出版社の『世界文学全集』第13巻に収録されているものを用いる。この版と1958年の版の内容は1点を除いてまったく同じである。その違いとは、1958年の版はこの巻全体について安應烈・朴南樹訳となっているだけで、作品ごとの訳者名が明記されていないのに対して、1960年の版では訳者名が作品ごとに明記されているという点である。『人間の大地』だけが朴南樹訳であり、『어린 왕자』を含め、他の作品はすべて安應烈訳となっている。なお、1971年に世界文学社から出された『世界文学大系』第3巻が1960年の東亜出版社版『世界文学全集』第13巻と同一であることを付け加えておく（ただし、口絵として入っているサン＝テグジュペリの肖像が、世界文学社のもは写真ではなく顔絵であり、この点だけは異なる）。念のために断っておけば、以上は筆者が実物を見て確認したことである。

6) 注2の末尾を参照。なお、対訳本は当然ながら原文と訳文がセットになっていなければならない。翻訳権 岩波書店が独占していた以上、岩波書店が対訳本を出さない限り、日本での対訳本はありえなかったわけである。

者数を数えることにしたのは、とくに韓国教育學術情報院の検索サービスでは、大学によってカタログへの登録整理の仕方に違いがあるためか同一のものが重複して検索結果に現れたり、また同一のもの重複であるように思われても、実物を見ないと明確に判断できないような場合も少なくないからである。ともかく、その結果を5年ごとに区切って整理したのが次の表である。

\* 人数は、それぞれの5年間に新しく登場した訳者の人数である。「……編」あるいは「……文」となっている場合も訳者として扱った。ただし、絵本と漫画本は対象から外した。

年代	人数	備考
1955-1959	1	1958年、安應烈訳
1960-1964	0	
1965-1969	1	
1970-1974	10	小説部門で召喚訳が1973年にベストセラー第1位、1974年に第2位 <sup>7)</sup>
1975-1979	6	1978年、少年少女世界文学全集に収録 <sup>8)</sup>
1980-1984	9	
1985-1989	28	1988年、児童向けの単行本 <sup>9)</sup>
1990-1994	24	1991年、児童向けの「定本完訳」本 <sup>10)</sup>
1995-1999	14	
2000-2004	44	2001年、生誕100周年記念特別版 <sup>11)</sup>
2005-2006	8	2006年3月末まで
計	145	

同じ訳者のものでも、『어린 왕자』単独で出されたり、他の作品と組み合わせて出されたりするなど、複数の形態で繰り返し出版されている場合も少なくなく、また、改訳されて出されるような場合もあるから、点数は145をはるかに超えることになる。韓国は、世界に冠たる *Le Petit Prince* の翻訳大国であると言ってよいであろう。

ここで、これほどの翻訳出版が可能になった背景が問題となるが、まず見ておかなければならないのは、著作権との関係である。上で述べたように、日本では著作権の関係で2005年までは自由に翻訳出版することができなかった。他方、韓国の場合には、まず1957年に著作権法を制定し、保護期間を30年に定め、第46条で外国人の

7) 김선남(2002), pp. 132~133.

8) 『소년소녀세계문학전집25』(프랑스편5), 계몽사, 1978.

9) 홍윤기역 『어린 왕자』 예림당, 1988.

10) 김용기역 『어린 왕자』 효린원, 1991. この訳書は「子供図書最初の定本完訳(어린이 도서 최초 정본 완역)」と銘打っている。

11) 강주현역 『어린 왕자』 문예당, 2001. これは、1993年にガリマール社から出された大型豪華本を翻訳したものである。

著作権に触れてはいるが、この著作権法が生きている間、韓国は著作権関係の国際条約に加盟しておらず、実効はなかった。その後、ソウル・オリンピックを2年後に控えた1986年に世界著作権協約세계저작권협약（日本では「万国著作権条約」と呼ばれている）に加盟するとともに、著作権法を全面改正した。1987年に施行されたこの新著作権法は保護期間を50年と定め、また、第3条で「外国人の著作物は大韓民国が加入または締結した条約に従って保護される」と定めているが、「ただし、当該条約発行日以前に発行された外国人の著作物は保護されない」という但し書きがついていた。これは、世界著作権協約が不遡及の条約だからである。

その後、1995年にベルヌ条約に加盟するとともに、著作権法の一部が改正され、翌1996年に施行された。ベルヌ条約が遡及効であるため、この改正によって第3条にあった但し書きが削除されたが、この時にはサン＝テグジュペリが死亡して50年を過ぎていた。したがって、韓国においては、*Le Petit Prince*が著作権保護の対象になったことはなく、合法的に自由に翻訳出版することができたのである。

とはいえ、これだけ多くの『어린 왕자』が出版されるためには、それだけ多くの読者を獲得していなければならない。そこで、筆者は、2006年2月に韓国の中央大学校ソウル・キャンパスで、また4月には日本の愛知大学名古屋校舎で、同じ内容のアンケート調査を実施した。その結果を見ると、韓国の学生の90%が『어린 왕자』を知っていると答え、実に約85%が読んだことがあると答えている。それに対して、日本の学生の場合、『星の王子さま』を知っていると答えた学生は約50%にすぎず、読んだことがあると回答したのは20%弱であった。

ところで、日本の学生にせよ、韓国の学生にせよ、読んだことのある学生は、ほとんどが高校時代までに読んでいる。そこで、両国の小学生から高校生までの全般的な平均読書量を見ておくことにしよう。一般図書のか月間での一人平均読書量は、日本で2004年に実施された調査によれば、小学生7.7冊、中学生3.3冊、高校生1.8冊である<sup>12)</sup>。また、韓国で同じく2004年に実施された調査によれば、小学生8.2冊、中学生3.3冊、高校生2.1冊となっている<sup>13)</sup>。つまり、両国の小学生から高校生までの読書量はほとんど変わらないのである。このことを勘案すれば、*Le Petit Prince*の訳書が読書の中で占める比重もまた、韓国のほうが日本よりもはるかに大きいことが分かる。

いずれにせよ、韓国の学生と比べれば日本の学生の『星の王子さま』読書率ははるかに見劣りするものである。とはいえ、20%近くに読まれている文学作品はそうあるものではない。日本でもよく読まれていると言ってよく、むしろ韓国では「異常なまでに」読ま

12) 文部科学省「データからみる日本の教育」（2005年）より。

13) 文化観光部「2004년 국민 독서실태 조사」より。

れていると言ったほうがふさわしいであろう。

### 3. 韓国ではなぜ「異常なまでに」読まれているのか

では、韓国ではなぜこれほどまでに、「異常」と言えるほどまでに、読まれているのであろうか。신광균 (2003) は、「これほどわが国で多くの読者を確保している外国作品もまれであろう」と書き、その理由を次のように説明している。

読者層も子供や青少年はもちろん、大学生を含む成人みなが好きであるなら、このように読者が『어린 왕자』をうまずたゆまず耽読している理由は何であろうか。おそらく、その内容と形式が子供にはファンタスティックな夢と愛を、大人には死の意味を考え人生の真実を反芻させる哲学を含んでいるからであろう。

このように青少年にはファンタジーの世界を、大人には生の知恵を提供する中心に幼い王子がいる。“王子”という身分は童話によく登場する主要な作中人物である。それは、王でもなく平民でもない中間者である王子こそ、読者がもっとも身近に感じながらも、自分自身に代わって夢を実現することのできる可能性がもっとも大きな存在であるからであろう。さらに、年をとった王子ではない“幼い”王子は、純粋と勇気の象徴であるためにその名前だけで読者に新鮮に迫ってくるからである。<sup>14)</sup>

たしかに、たんに「よく」読まれている理由としてであれば、この説明で十分であるかもしれない。しかし、この説明は、韓国人の読者にのみ当てはまるものではなく、韓国で「異常なまでに」読まれている理由としては不十分であろう。さらに、たとえば、「大切なものは目には見えない」という西洋的合理主義とは一線を画する *Le Petit Prince* の主要なテーマの中などにも、その理由を探ることができるかもしれないが、そのような作品の内容からの説明にはやはり限界があるように思われる。作品内容からの説明をいかに積み重ねても、韓国人の読者にのみ当てはまるものにはならず、したがって、韓国で「異常なまでに」読まれている理由としては十分なものになりえないであろうからである。そこで、たとえば韓国における読書環境や教育環境といった外的要因にも目を向ける必要があるように思われる。

ここで、上の表を見ると大きな山が二つあることに注意を促したい。1985年から1994年にかけて訳者数が激増していることと、2000年代になってからそれ以上の激増が見ら

14) 신광균 (2003)。韓国教育芸術情報院 (全国大学所蔵資料検索サービス) からダウンロードした XML ファイルを参照したため、この箇所ページ数は不明。

れることである。このことは、それらの年代に訳書数が激増したことを意味している。

前者の激増については、次のような解釈が可能かもしれない。まず第一に、この時期は読書運動が活発化した時期と一致するということである。1988年のソウル・オリンピックは、韓国が世界の先進国の仲間入りをしたという自負を韓国人に与えたが、同時に、高度成長の過程であまりにも物質的・経済的側面にとらわれ、精神的側面がなおざりにされてきたのではないかという反省も起こった。その中で読書運動が活発化し、1989年には文化観光部傘下の社団法人「ハンウリ読書文化運動本部한우리독서문화운동본부」が設立され、1990年に活動を開始した。また、この時期には学習誌の発行も活発化しており、このような背景と無関係であるとは思えない。

さらに、もうひとつ考えられるのは、1973年と1974年に김현 訳がベストセラーになっている<sup>15)</sup>こととの関係である。この当時の読者を第一世代と呼ぶとすれば、この第一世代の年齢層は、김현 訳がとくに子供を読者に想定した翻訳ではないことを考慮すれば<sup>16)</sup>、おそらく10代後半以上（とくに高校生や大学生）であったろう。1980年代後半から1990年代前半は、この第一世代の子供たちが読書に親しみ始めるころに当たり、子供向けの『어린 왕자』が出版され始めたことと符合している。1988年に子供用のものが出され、1991年には「子供図書最初の定本完訳」と銘打ったものが出されているのである（表を参照）。たしかに、これに先立つ1978年に「少年少女世界文学全集」に収録されてはいる。しかし、筆者が上述のいくつかのデータベースで調べた限りでは、それ以後1988年まで、明確に子供の読者を意識して出版された『어린 왕자』は見当たらない<sup>17)</sup>。

この1990年前後の読者を第二世代と呼ぶとすれば、2000年代になっての訳書、とりわけ子供用の訳書の急増は、第二世代の子供たちが読者層として登場してきたことと関連付けることができよう。2000年は、作者サン＝テグジュペリの生誕100周年に当たり、その影響があったと考えることもできはするが、訳書の急増ぶりを見れば、むしろ第二世代を受け継ぐ第三世代の登場によるものではないかと思われる。

このように、親から子へ、さらにその子へと読者層が受け継がれると同時に、ハンウリ読書文化運動本部の活動に象徴される読書運動の活発化、学習誌発行の活発化を背景にして、『어린 왕자』が必読書とされるにいたったと見ることができよう。また、

15) 以後、『어린 왕자』がベストセラーに登場しないのは、訳本の種類が増え、読者が特定の訳本に集中しなくなったことの結果ではないかと思われる。

16) 문장社から1993年に出版された重版を参照した。

17) もちろん、この間に子供用の『어린 왕자』が出版された可能性がないわけではない。しかし、データベースで確認できない以上、あったとしてもごく少数であったろう。

それにともなって、教育熱が非常に高い韓国において、父母が子供に読ませなければならない必読書として『어린 왕자』をとらえるなどして、読者層が年齢の下のほうに向けて拡大していったものと思われる。

以上、いちおう推測しうることを述べたが、韓国でなぜ「異常」と言えるほど『어린 왕자』が読まれているのか、その理由が筆者にはもともと分からない点である。作品そのものの内的要因と読書環境などの外的要因が重なった結果であることは間違いのないであろう。

#### 4. 日・韓における *Le Petit Prince* 翻訳の歴史的流れ

ここで、1953年に出された内藤濯訳と1958年に出された安應烈訳に立ち戻ることしよう。金志洙(2002)は、この安應烈訳と、2001年にサン＝テグジュペリ生誕100周年記念として出された강주현訳(表および注11を参照)とを比較し、40年間の間に韓国語訳がどのように変わったかを論じている。この論文の筆者は、安應烈訳には日本語的な文体が見られるとして、次のように書いている。

19世紀末韓国に西洋文学が伝わり、フランス文学作品も翻訳受容されたが、その当時には仏語から直接翻訳されたものよりは、日本語に翻訳された本を韓国語に翻訳直した重訳が多かった。20年代と30年代を経て直接翻訳されるものが多くなったとはいえ、50年代までは重訳の痕跡が多く残っている。したがって、50年代に翻訳されたただ1冊の『어린 왕자』にもいまでは見慣れない日本語の言い回しを見いだすことができる。18)

ここでは微妙な言い回しがされており、安應烈訳が日本語訳からの重訳であるとは直接的に言ってはいない。しかし、この論文に付けられたフランス語による要旨の中で、「韓国では、アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの *Le Petit Prince* は50年代以来たくさん翻訳されている。はじめは日本語版から翻訳されており、したがって日本語的な文体が感じられる」と書き、重訳であったと断言している。

すでに述べたように、2005年まで *Le Petit Prince* の日本語訳は内藤濯訳『星の王子さま』しか存在しなかったのであるから、安應烈訳『어린 왕자』が日本語訳か

18) 金志洙(2002)、p.174。なお、この著者は、1958年の訳者が誰であるかは不明であるとしているが、間違いなく安應烈である(注5を参照)。



らの重訳であるとすれば、それは内藤濯訳を韓国語訳したものであることになる。金志洙(2002)の主眼は2001年の訳書との比較対照にあるためか、内藤濯訳と安應烈訳との比較対照は行っていない。そこで、その両者を実際に比較対照してみれば、後者が前者の重訳であるところか、その二つの訳はまったく正反対の関係にあることが分かるのである。

たとえば、次の例を見よう。

原文<sup>19)</sup>：

----Mais qu'est-ce que signifie "éphémère"? répéta le petit prince qui, ide sa vie, n'avait renoncé à une question, une fois qu'il l'avait posée.

----Ça signifie "qui est 2menacé de disparition prochaine."

----Ma fleur est 3menacée de disparition prochaine?

----Bien sûr.

《Ma fleur est éphémère, se dit le petit prince, et elle n'a que quatre épines 4pour se défendre contre le monde! (….)》(p. 282)

内藤濯訳：

「だけど、はかないってなんのこと？」

一度なにかきだすと、しまいまできかずにはいられない王子さまが、くりかえしました。

「そりゃ、〈そのうち消えてなくなる〉っていういみだよ」

「ぼくの花、そのうち消えてなくなるの？」

「うん、そうだとも」

ぼくの花は、はかない花なのか、身のまもりといたら、四つのトゲしか持っていない。(pp. 86-87)

安應烈訳<sup>20)</sup>：

“그런데 단명이라는 건 무슨 말이에요?”

한번 물어 본 것은 1평생 그저 지나쳐 버린 일이 없는 어린 왕자는 연거푸 물었다.

“그것은 오래지 않아 사라질 2연려가 있는 것이란 말이다.”

19) テキストとしては、Antoine de Saint-Exupéry, *Oeuvres complètes*, II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2001 に収録されているものを用いる。

20) 安應烈訳の末尾につけた日本語訳は、安應烈訳を筆者が日本語に直訳したものである。

“내 꽃이 오래지 않아 사라질 3연려가 있어요?”

“아무렴”

내 꽃이 단명하다. 그런데 4외세(外勢)를 막기 위해서는 가시가 네 개 있을 뿐이지! (pp. 72)

(「それで短命って何のことなんですか?」

一度きいてみたことは、1生まれてこの方、そのままやりすごしてしまったことのない幼い王子は続けざまにきいた。

「それは、そのうちに消えてなくなる 2心配があるということだ」

「ほくの花がそのうちに消えてなくなる 3心配があるんですか?」

「もちろん」

ほくの花は短命だ。ところが、4外勢をふせぐためにはトゲが 4 つあるだけなんだ!)

原文の下線部1から3までは内藤濯訳ではまったく訳出されずにすまされているのに対して、安應烈訳(下線部1から3)では原文に忠実に訳出されている部分である。また、原文の下線部4は、直訳すると「世界から身を守るために」であるが、内藤濯訳では下線部のように「身のまもりと云ったら」とくだしているのに対して、安應烈訳の下線部4では「외세(外勢)를 막기 위해서는 (外勢をふせぐためには)」と直訳に近い訳作りをしている。

このような例はいくつでも挙げることができるが、ここでは、もうひとつ極端な例を挙げるにとどめよう。

内藤濯訳：

王子さまは、遠いところで迷子にでもなったように、きつした目をしていました。(p. 138)

安應烈訳：

그의 눈길은 말가니 먼 데를 바라보고 있었다. (p. 102)

(彼の視線はきっぱりと遠くを眺めていた。)

この両者の訳を比べれば、これらが同じ文を訳したものであるとは信じがたいであろう。しかし、これらはまぎれもなく同じ文の訳なのであり、その原文は次のとおりである。

Il avait le regard sérieux, perdu très loin. (p. 312)

原文を直訳すれば、「彼は真剣な眼差しをしており、その眼差しははるか遠くに消えていた」すなわち「彼は真剣な眼差しではるか遠くを見ていた」となる。内藤濯訳は誤訳であり、安應烈訳が正訳である<sup>21)</sup>。

以上の二つの例を見るだけでも、安應烈訳が内藤濯訳からの重訳ではなく、フランス語原文から直接訳されたものであることは明白である。安應烈訳は、西洋文学の翻訳に際して日本語訳からの重訳が広く行われていた時代にあつて、原典から直接翻訳されたものとして評価されるべきものである。なお、安應烈訳に日本語的な言い回しが多く見られるとすれば、それは重訳によるものではなく、訳者が韓国語と日本語の強制的バイリンガルの世代に属しているということと、辞書として仏和辞典以外では仏和辞典が用いられていたであろう<sup>22)</sup>ことに由来していると思ふことができよう。

それはともかく、安應烈訳『어린 왕자』と内藤濯訳『星の王子さま』との間に見られる決定的な違いは次の2点にある。すなわち、(1) 内藤濯訳は子供を読者として想定し、「です・ます」体でくだいた訳作りをしているのに対し、安應烈訳は「-다」体を用い直訳に近く、とくに子供を読者として意識してはいないこと、(2) 出版形態を見ても、上述のように、内藤濯訳は「岩波少年文庫」の1冊として出されており、子供を読者として想定しているのに対し、安應烈訳は「世界文学全集」の1冊としてサン＝テグジュペリの他の作品とともに出されており、一般読者を対象としていること、である。

したがって、日本と韓国での *Le Petit Prince* 翻訳の歴史的流れを、次のように整理できよう。

日本においては、子供を読者として想定した訳書から出発し、2005年になってから大人を読者として想定した訳書も出ることになり多様化した<sup>23)</sup>。内藤濯訳しか存在しな

21) 1943年にアメリカで出されたKatherine Woods訳が、『His look was very serious, like someone lost far away』となっており、内藤濯訳と同じ誤訳をしている。内藤濯が翻訳する際、Katherine Woods訳を参照し、その誤訳に引きずられてしまった可能性がある。なお、2005年以降に日本で出された新訳本は、すべて安應烈訳に類した訳法をしている。

22) 仏和辞典はCharles Alévêque編の辞書が1901年に出版されて以来、1956年に朴南樹編の辞書が出されるまで空白である。しかも、この1956年の辞書の総ページ数は264ページにすぎない。1957年には総ページ数905ページの辞書(이진구編)が出てはいるが、おそらく翻訳に利用するには無理であったろう。ちなみに、仏和辞典についてみれば、たとえば大倉書店から出されていた野村泰享編の場合、総ページ数は1898年の版が725ページ、1919年の版になると1307ページになっており、1937年の『コンサイス 仏和辞典』(丸山順太郎編、三省堂)の場合、本文のページ数は1002ページあった。

23) たとえば、倉橋由美子訳の場合、訳者あとがきで、大人を読者に想定して訳したと書かかれている。新訳本で想定されている読者の関係については後で触れることにし、ここで形態面での多様性に触れておく。川上勉・廿楽美登利訳は付録にフランス語原文を付け、山崎庸一郎訳は詳細な訳注を付けている。変わり種は辛酸なめ子

かった2005年以前にも子供だけでなく大人も読むようになり、読者層は広がっていたが、今後この方向で、すなわち年齢層の下から上へという方向で広がる可能性がある。他方、韓国においては、一般読者を想定した訳書から出発して、おそらく80年代または90年代から子供を読者として想定した訳書が出るなどして多様化した。読者層は年齢層の上から下へという方向で広がったと見ることができる。

## 5. 内藤濯訳と安應烈訳が示唆すること

上で見た内藤濯訳と安應烈訳との間の相違は、実は、*Le Petit Prince*の翻訳における基本的な問題を提示しているのである。ここで、そのことについて簡単に述べておきたい。

二人の翻訳の根本的な違いのひとつは、読者をどう想定しているかにあった。そもそも*Le Petit Prince*は、作者がアメリカに滞在中、出版社からクリスマスプレゼント用として子供向けの本を書いてほしいと依頼されて書かれたものである。その限りでは、対象として想定される読者はもっぱら子供であると考えられる。しかし、この作品にはさまざまなメッセージがこめられており、象徴的な要素も多く、はたして単純に子供向けの作品、あるいは児童文学としてとらえてよいのかどうか、問題になるところである。児童文学者たちの中には、この作品を見児童文学の中でも特異なものであると位置づけたり、あるいは児童文学ではなく子供向けに仮装した大人向けの本であるとみなす人々もいる。さらには、子供向けなのか大人向けなのか分からないところにこの作品の新しさを見いだす評者もいるのである<sup>24)</sup>。

実際、この問題は、作品冒頭の献辞ですでに示唆されている。サン＝テグジュペリは、この本をひとりの大人に捧げることを許してほしいと子供たちに謝り、「子供だったころのレオン・ウェルト」に捧げているのである。大人に捧げられた献辞からすれば、この作品の読者として考えられているのは大人であり、子供時代を忘れてしまった大人が、もういちど子供の視線にもどって人生を、あるいは世界を見つめ直すことを求めていると理解できる。しかし、その一方で、その献辞が子供に謝っているということは、子供が読むことを想定して書かれていることになる。実際、本文の文章自体は子供にも読み

訳と河原泰則訳で、前者（訳者は漫画家）は訳者自身が描いた挿絵を用い、訳自体むしろ翻案というものであり、後者（訳者は音楽家）はフランス語原文の抜粋と、その朗読および音楽の入ったCDを付録として付けている。

24) 三野博司 (2005)、pp. 192-193 参照。

うる平易な文体で書かれ、また子供たちに呼びかけている箇所もある。その一方で、語り手が子供の立場に立ち、子供の目を通して行う大人批判は、大人が読まなければ意味がないとも言うる。

このような重層的な構造のために、この作品を翻訳する際、読者をどう想定するかがまず問題となるわけである。それには三つの立場が考えられる。ひとつは、読者として大人を想定する立場、二つ目は子供を想定する立場、そして、三つ目はその中間的なもので、大人と子供の両方を読者として想定する立場である。2005年から日本で出版された新訳本を見れば、倉橋由美子訳と川上勉・甘楽美登利訳が明確に大人を読者と想定した代表格、藤田尊潮訳と谷川かおる訳が子供を想定した代表格、小島利明訳と稲垣直樹訳が第三の立場の代表格であると言える<sup>25)</sup>。韓国においても、同様に、数多くある訳本をその三つの立場のいずれかに分類可能であろう<sup>26)</sup>。このような読者の問題を、日本と韓国における最初の翻訳がすでに提示していたのである。

内藤濯訳と安應烈訳の第二の対立点は、「です・ます」体と「-다」体という文体の違い、および、くだいた意識に近い翻訳スタイルと直訳に近い翻訳スタイルの違いにあった。この違いは上に引用した部分からも理解されようが、もうひとつ、例をあげておこう。

原文：

〈Alors, toi aussi tu viens du ciel! De quelle planète es-tu?〉  
「J'entrevois aussitôt une lueur, dans le mystère de sa présence, et  
l'interrogeai brusquement」  
〈Tu viens donc d'une autre planète?〉 (p. 242)

内藤濯訳：

「じゃあ、きみも、天からやってきたんだね！ どの星からきたの？」

25) この第三の立場については、どちらにより大きな比重を置くか、すなわち、どちらかと言えば大人を対象にするが子供でも読みうるものにするという立場から、その逆の立場まで振幅がありうる。たとえば、河原泰則訳は親が子供に読んで聞かせることを求めており、どちらかと言えば前者の立場に、石井洋二郎訳は「原則的に子どもたちに語りかけるような原文の調子を生かすという主旨から『です・ます』調を採用し、できるだけ平易な日本語で訳すことを基本方針とする一方、(……) おとなの読者の鑑賞にも十分耐えられるような訳文にすること」を心がけたとしており、後者の立場に近いと言うであろう。

26) 韓国の場合、とくに子供向けのものは、小学生低学年用とか小学生高学年用とか銘打っており、かなり明確である。なお、子供向けのものは、어요体または습니다体が用いられていることと、ごく一部の例外はあるにせよ、挿し絵にサン＝テグジュペリ自身のものが使われていないという特徴がある。

1そのとたん、王子さまの夢のような姿が、ぼうっと光ったような気がしました。2ぼくは、息をはずませてきました。

「じゃあ、あんたは、どこかほかの星からきたんだね？」(p. 16)

安應烈訳：

“그림 아저씨두 하늘에서 왔군! 아저씨 언느 별에서 왔어?”

1나는 그의 신비로운 존재를 알아내는 데에 어떤 서광이 비침을 깨닫고 2별안간 이렇게 물었다.

“그럼 너는 다른 별에서 왔니?”(p. 32)

(「じゃあ、おじさんも空からきたんだね！おじさんはどの星からきたの？」)

1わたしは、彼の神秘的な存在を理解するのにある曙光がさすのに気づき、2いきなり次のようにきいた。

「じゃあ、きみはほかの星からきたのかい？」)

まず、下線部1の両者の訳を比べれば、同じ文を訳したとは思えないほど異なっている。原文を直訳すれば「わたしは、彼の存在の神秘の中に一条のほのかな光をかいま見た」となり、突然砂漠の中に姿を現し、羊の絵を描いてくれとねだった不思議な子供の謎を解く糸口が見つかった、ということの意味している。内藤濯訳が、誤訳であると指摘されてもおかしくないような思いきった意訳をしているのに 対し、安應烈訳は「알아내는 데에 (理解するのに)」と補足しつつ、「신비로운 존재 (神秘的な存在)」「서광 (曙光)」といった難しい言葉を用いて、原文に忠実であろうとしている。次に下線部2を見れば、原文の《 *brusquement* (突然、だしぬけに、不意に)》を内藤濯訳が「息をはずませて」とやはり大胆な意訳をしているのに 対し、安應烈訳はここでも「별안간 (いきなり)」と直訳しているのである。

もちろん、意訳すれば子供向けになるとか、あるいは逆に直訳であれば大人向けになるとかということではない。子供向けであろうと大人向けであろうと、意訳か直訳かという問題は、訳者の翻訳観、김윤진 (2000) の言葉を借りれば「*윤리*」の問題である。二人の翻訳スタイルの相違は、翻訳者が翻訳に当たって選択しうる翻訳スタイルの両極端な典型例を示しているのである。したがって、この点は、何も *Le Petit Prince* の翻訳にのみかかわる問題ではなく、翻訳一般に関係する問題ではあるが、ここでの二人の翻訳スタイルの相違には、想定されている読者の相違が反映されていることは間違いない。

27) ここでの「倫理」は翻訳家の態度決定を意味し、善・悪といった価値判断は含まれない。

ところで、*Le Petit Prince*という作品が持っているもう一つ大きな特性は、作者自身の挿し絵が入っているということである。文章と挿し絵の間に有機的関係があるのはもちろんであるが、挿し絵と挿し絵の間にも有機的関係があることを忘れてはならない。

たとえば、第4章には3枚の挿し絵が挿入されており、それらはガリマール社の原本（プレイヤード版およびフォリオ版）では見開きページの左側に1枚と右側に2枚という配列になっている。これらの絵は3枚でセットになっており、左側のはトルコ人の天文学者が天体観測をしている絵であり、右側の1枚目は、その学者が発見した小惑星B-612番について国際天文学会で発表するが、トルコ風の服装をしていたがために信用されなかった時の絵で、2枚目は西洋風の服装で発表したためにその発見が認められた時の絵を表している。これらは、原本のように見開きのページに収まっていてこそ、ひとつのまとまったものとして視覚的に知覚されるのである。逆に、同じ1セットではあっても、第1章に挿入されている象を飲み込んだボアの2枚の絵は、同じページあるいは見開きのページにあって一気に目にはいるのでは都合が悪い。外側だけが描かれ帽子としか見えない絵が、原本のように、ページをめくることによって象を飲み込んだボアの絵であることが分かる仕組みでなければ、意外性が半減するからである<sup>28)</sup>。

訳書で、文章と挿し絵の間での有機的関係を維持しながら、挿し絵どうしの有機的関係をも維持することは、ほぼ不可能に思われる。原本と同じ文字数、行数で翻訳するのは不可能であるから、前者の関係を維持すれば後者の関係が維持できなくなる（たとえば、上で例に出した第4章の3枚の挿し絵を見開きのページに入れることができなくなる）ということが当然ながら起こりうるわけである。

ところが興味深いことに、この不可能に思われる作業を1958年の東亜出版社版「世界文学全集」第13巻は実現してしまっているのである。この本は本来が縦書きで、これに収録されている『人間の大地』などは縦書きであるにもかかわらず、『어린 왕자』だけは横書きにしている。しかも、行間を操作して1ページ当りの行数を24行から31行の幅で調節することによって、訳書のページを原本のページと一致させ<sup>29)</sup>、文章と挿し絵の関係の維持と挿し絵どうしの位置関係の維持とに成功しているのである。若干のずれはあるものの、訳書でここまで原本と一致させることができるとは驚くほかない。

他方、「岩波少年文庫」の『星の王子さま』は縦書きであり、原本でひとつの

28) とはいえ、原本でも文章と挿し絵の位置がずれている場合もある。たとえば、第20章の末尾で王子は草の上で泣くが、その絵は第21章の終りに置かれている。

29) したがって、総ページ数は原本（プレイヤード版およびフォリオ版）と訳本の間でまったく同じで、第1章から最後のページまでの絵ページ数はいずれも87ページである。

ページに挿入された複数の挿し絵の一部が次のページに移動しているといったことが見られるばかりか、挿し絵の位置が文章とずれている場合さえある<sup>30)</sup>。ちなみに、同じ内藤濯訳『星の王子さま』がやはり岩波書店から横書きの単行本でも出ているが、安應烈訳ほどの原本との一致は見られない。なお、日本での新訳本の中には横書きにしているものもあり、それらは概して縦書きのものよりも挿し絵の配置が原本に近くはなっている<sup>31)</sup>。それでも、やはり安應烈訳ほど一致させているものはない。このことは、現在韓国で洪水のように出版されている『어린 왕자』についても同じである。

ともかく、東亜出版社版「世界文学全集」第13巻に収録されている『어린 왕자』には、はっきりとした訳者の意思が感じられる。*Le Petit Prince*は挿し絵と一体になった作品であり、文章と挿し絵の有機的一体性および挿し絵どうしが持っている有機的一体性を訳書の中でも完全に維持するという意思である。内藤濯が子供の読者を意識し、こなれて読みやすい訳作りを最優先させているのに対して、安應烈は原文に忠実な訳作りと、挿し絵と文章の有機的関係とを最優先しているのである。*Le Petit Prince*翻訳出版における両極に位置する態度であり、すべての翻訳者はこの両極の間で態度決定を迫られていることになるであろう。

## 6. おわりに

1953年の内藤濯訳と1958年の安應烈訳の比較対照を通して、日本と韓国における*Le Petit Prince*翻訳の歴史的流れを整理するとともに、この作品が持っている特性から派生する翻訳上の問題が、その両者の訳の根本的相違となって現れていることを見た。とりわけ、安應烈訳については、翻訳者の「倫理」の側面から再評価、再点検されるべきである。たとえば上で言及した金志洙(2002)に見られるように、安應烈訳が翻訳論的な観点から取り上げられることがあっても、それはもっぱら、最近の訳書と比較して、時代の流れの中で翻訳スタイルや訳語がどのように変化したかを検討するにとどまり、拙論で触れたような挿し絵の問題にまで注意が向けられていないのは残念である<sup>32)</sup>。韓国での最初の翻訳では原本とほぼ完全に一致させるという細心の配慮がな

30) 典型的には第4章の3枚の絵で、見開きのページに収められていないばかりか、文章とも完全にずれている。ただし、ここで対象としているのはあくまで初版であり、現在出ている新版の「岩波少年文庫」001のものでは、見開きのページに収められている。またこの新版では、全般的に初版よりも絵の位置が原本に近くなっている。

31) とくに、山崎庸一郎訳と小島俊明訳。



されていたのであり、そこまでこだわる必要があるかどうかは別にして、少なくともこのことは *Le Petit Prince* の翻訳出版に対する問題提起として受け止めることができよう。

日本においても、今後さらに *Le Petit Prince* の訳本が出される可能性があるが、この作品が持っている特殊性がどのように処理されるか、また、読者層がどのように広がるか、注目される場所である。

## 【参考文献】

- 金志滋(2002) 「『어린 왕자』의 번역에 관한 고찰」, 『民族과 문화』 제 11 집漢陽大學出版院, p. 174
- 김선남(2002) 『독서문화와 베스트셀러』 일진사, pp. 132-133
- 김윤진(2000) 『불문학텍스트의 한국어번역 연구』 서울대학교출판부
- 김홍석(2003) 「프랑스 소설 텍스트의 번역에 관한 연구 --- *Le Petit Prince* 를 중심으로 ---」, 홍익대학교 대학원 석사논문
- 신광균 (2003) 「어린 왕자와 어른 왕 = *Le petit prince et le grand roi*; 썩떡쥐뻐리의 작품 『어린 왕자』와 『성채』를 중심으로」, 『동화와 번역』 5집, 건국대학교 동화와 번역연구소
- 片木智年 (2005) 『星の王子さま学』 慶応義塾大学出版会
- 三野博司 (2005) 『『星の王子さま』の謎』 論創社, pp. 192-193

## テキスト

- 安應烈訳 『어린 왕자』, 「世界文学全集」 第13巻、東亞出版社、1960 (1958)
- 内藤濯訳 『星の王子さま』, 「岩波少年文庫」 53, 岩波書店、1964 (1953)
- Le Petit Prince*, in *OEuvres complètes de Saint-Exupéry*, II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2001
- 2005年以降の新訳本については、本文の注2を参照。

32) 김홍석 (2003) がやはり安應烈訳を송재영訳 『어린 왕자의 신비한 수수께끼를 찾아서』 正宇社 (2002年) と比較している。ただし、この論文で対象となっている安應烈訳は1976年に三中堂から出版されたものである。なお、念のために付け加えておけば、安應烈訳で現在販売されているものとしては、英訳 (Katherine Woods訳) を付録につけた人文出版社のものと、신원문화사에서出されている忍点 (『야간 비행』と組み合わせて밀레니엄복스シリーズの1冊として出されているものと『중학생이 보는 어린 왕자』) があるが、これらは訳自体が1958年のものとは異なるとともに (人文出版社のものと신원문화사의ものとの間でも異なる。前者の訳のほうが1958年の訳に近い)、1958年の版に見られる挿絵を念頭においた印刷上の配慮が見られない。安應烈訳を組上に載せる場合、1958年の東亞出版社版を対象にするのが有益である。

## 参考Webサイト

<http://glaw.scourt.go.kr/> (＜韓国＞総合法律情報)

<http://webcat.nii.ac.jp/> (＜日本＞国立情報学研究所 NACSIS Webcat : 総合目録データベースwww検索)

<http://www.gallimard.fr/> (＜仏＞ガリマール社)

<http://www.hanuribook.or.kr/> (＜韓国＞ハンウル読書文化運動本部)

<http://www.jasrac.or.jp/> (日本著作権協会)

<http://www.komca.or.kr/> (韓国著作権協会)

<http://www.kyobobook.co.kr/> (＜韓国＞インターネット教保文庫)

<http://www.lepetitprince.net/> (＜日本＞星の王子さま総覧)

<http://www.mct.go.kr/> (＜韓国＞文化観光部)

<http://www.mext.go.jp/> (＜日本＞文部科学省)

<http://www.ndl.go.jp/> (＜日本＞国立国会図書館)

<http://www.nl.go.kr/> (韓国国立中央図書館)

<http://www.riss4u.net/> (韓国教育学术情報院 韓国研究情報サービス)

## 要 旨

サン＝テグジュペリの *Le Petit Prince* の日本語訳は、長い間、1953年に訳された内藤濯訳のみであったが、2005年から新訳本が続々と出されるようになった。これは日本における原本の著作権保護期間が終了し、岩波書店が持っていた翻訳独占権が消滅したからである。他方、韓国では1958年に安應烈訳がはじめて出されて以来、この作品が著作権保護の対象になったことがないこともあり、多種多様な翻訳が出版され、*Le Petit Prince* の翻訳大国とも言う状況を示している。そして、韓国でのこの作品の読書率は驚くべきものである。その理由を解釈するためには、作品の内容だけでなく、ハンウリ読書文化運動本部に象徴される読書環境など外的要因も考慮しなければならないであろう。ところで、内藤濯訳と安應烈訳を比較対照することによって、日本と韓国でのこの作品の導入のされ方が正反対であったことが分かる。すなわち、日本では子供が読者として想定されていたのに対し、韓国では一般読者が想定されていたということである。このことは、翻訳スタイルおよび出版形態にも現れている。しかも、安應烈訳の場合は、挿し絵の配置を原本とほぼ完全に一致させる配慮がなされていた。両者の翻訳を比較検討することは、*Le Petit Prince* が内包している特性をどのように翻訳の中に再現させるかという問題について、さまざまな示唆を与えてくれる。

キーワード：『어린 왕자』、『星の王子さま』、安應烈、内藤濯、翻訳、挿し絵、出版状況、著作権、読者、倫理

투 고 : 2006. 8. 31  
1차 심사 : 2006. 9. 9  
2차 심사 : 2006. 9. 30

住 所 : (488-0033) 愛知県 尾張旭市東本地ヶ原町1-20-7  
電 話 : 0561-52-3445  
e-mail : mtagawa@vega.aichi-u.ac.jp